

2022年1月30日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 牧之瀬俊彦

奏楽 大谷京子

前奏

招詞

ヘブライ人への手紙 第3章 7節-8節

讃美歌

讃美歌 21-12-1 (とうときわが神よ)

交読

詩編 第22篇 1節-22節 (p. 23)

祈祷

聖書

マルコによる福音書 第15章 33~41節

(新約 p. 96)

讃美歌

讃美歌 21-289-3 (人の子イエスよ)

説教

「何を恐れるのか」

イエスさまが十字架につけられた時、その十字架の上で語られたとされる言葉が七つ、4つの福音書の中に伝えられ、重んじられてきました。

この七つのうち、おそらく多くの人が覚えているのは、

ルカによる福音書の第 23 章 34 節、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」。この言葉は、ずいぶん多くの人々の心を捕らえ、イエスさまの十字架の意味が何かを明らかにしてきましたから、この祈りに触れたから、主の赦しの意味が分かるようになったと言う人もおられるでしょうし、信仰を深めるみ言葉として記憶しておられる方もあるだろうと思います。イエスさまのこの七つの言葉にはそれぞれに意味があり、どれも大切な言葉ですが、わたしたちの記憶はどうでしょうか。すぐに思い出せる言葉ばかりでしょうか。

今朝わたしたちに与えられている聖書箇所、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という言葉、これについてはどうでしょうか。マルコによる福音書やマタイによる福音書は、イエスさまが十字架で叫ばれた言葉はこれ一つであった、と記録しています。そうすると、先ほど紹介したルカによる福音書の言葉のように、このみ言葉に心打たれましたという人はどれくら

いいのでしょうか。

日本語の聖書でも、カタカナで記しているように、マルコによる福音書は、ギリシャ語で書かないで、まずアラム語で書きました。ここに記されているカタカナで記されているのは、アラム語で、このように伝えていると理解されています。たとえばローマで、あるいはギリシャで、ユダヤの人たちの言葉を使わないで礼拝をしている人たちの中で、その人びとが礼拝をしている時に、わたしたちと同じように、アーメンという言葉や、ハレルヤという言葉そのまま使うように、イエスさまの十字架の出来事が語られるところでは、この「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」という言葉を、皆は覚えていて、繰り返し、口にしたのではなかと思えます。

そしてもう一つ気がつく言葉があります。39節。このイエスさまの叫びを聞いた、イエスさまの死を真正面から見ていた人がいました。ローマの軍隊の百人隊長です。ローマ帝国に

雇われていた外国人かもしれません。ですから、イエスさまが語られた神を、まだ信じていなかっただろうと思います。その人が、このイエスさまのお姿を見て「**本当に、この人は神の子だった**」と言ったとあります。この言葉は、この福音書の中でも最も大切な言葉の一つです。マルコによる福音書はその最初に、「**神の子イエス・キリストの福音の初め**」と書き始めました。つまり、自分が書くこの主イエスの物語は、何よりも、神の子としての主イエスの物語だということを明らかにして、それが第8章、この福音書の真ん中に来ると、ペトロがイエスさまに問われて、「**あなたは、メシアです**」と答えています。目の前に生きておられるイエスさまを、あなたが神から遣わされた救い主だと認めます。それが福音書のほぼ真ん中ですから、聖書を読む人にとってここは峠のようなもの、分水嶺、とても大事な頂点に達したところの言葉として受け入れられてきました。そこに一つの頂点があるとすれば、今日のところには、福音書にとってもう一つの頂点があることになる。それは何か。まさにイエスさまを神の子として認める、その言葉を、初めて

人が語った。イエスさまが洗礼をお受けになった時に、これもマルコによる福音書が最初に語っているところですが、天から声がして、「これはわたしの愛する子」という言葉が聞こえたがあります。だとすれば、その天からの声に応えるようにして、この百人隊長が「はい、そうです。この方こそ神の子です」と言ったことになる。これは信仰告白です。そしてその信仰の言葉を呼び起こしたのが、イエスさまの死であり、十字架上でのイエスさまの叫びだった。ですから、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という言葉を聞きながら、この信仰の言葉が生まれた。そうだとすれば、わたしたちもこのみ言葉を聞いて信仰を言い表せているでしょうか。

たとえば先に紹介したルカによる福音書第 23 章の 34 節だったら、ああ、わたしは本当に無知なままに、とんでもないことをしてきたと悔い改めて、涙をながしながら主イエスに感謝を献げるかもしれません。けれど、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」というみ言葉を聞きなが

ら、同じように悔い改めて、涙が自然に流れるでしょうか。しかも、そこでこそ聞くべき言葉を聞かないと、わたしたちは十字架の言葉の意味や、その出来事の意味さえ分からなくなってしまわないでしょうか

イエスさまがここで、大声で叫ばれた言葉は、先ほどご一緒に交読した詩編の最初の言葉です。イエスさまは絶望の言葉を叫ばれた。けれど、詩編第 22 篇を読み進めていくと分かるのは、すぐに 4 節で、「あなたは聖所にいまし、イスラエルの賛美を受ける方。わたしたちの先祖はあなたに依り頼み、依り頼んで、救われて来た」と神の救いのみわざをほめたたえるようになります。そして更に進むとやがてこの詩編は、貧しい人を顧みる神をほめたたえ、その貧しい者に勝利を与える神の力、勝利を賛美する、そういう歌に変わっていきます。そうすると、イエスさまが十字架上で叫ばれたのは、絶望の言葉だと言いきれるのか。あるいはここでイエスさまは絶望などしておられないのではないか、ということになってきます。

けれど、なお考えるとすれば、ではなぜ、イエスさまはここで、この「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という言葉を選ばれたのでしょうか。この詩編の後に続く勝利の言葉が大切なのであれば、ここでのイエスさまの言葉は単なる枕詞に過ぎないのでしょうか。この、なぜわたしを捨てたのか、という言葉には重みがないのでしょうか。そんなことはありません。もしここでイエスさまが、ただ勝利の歌を歌おうとされるのでしたら、それにふさわしい歌はいくらでもあったはずです。明らかに望みを見せられていながら、今は、やはり、神に捨てられているという、絶望的な状況に深い痛みを覚えておられたに違いないと思います。そしてこれが詩編だということは、イエスさまがいつも歌っておられた歌の一つだったと思います。安息日のたびに、会堂に集まって礼拝を守り、そのような礼拝では、この詩編が何度も読まれ歌われたことと思います。あるいは十字架に先立つ最後の晩餐で弟子たちと一緒に賛美を歌いながらオリーブ山に行かれたとありま

す。おりあるごとに讚美歌を、詩編を歌った。救いを見失っていたユダヤの人々は、おそらく、なぜ、わたしをお見捨てになったのですか、という歌も、きっと身につまされるような思いで歌っていたのではないか。早く神の勝利を賛美したい、勝利の歌を歌いたい。だのに、なぜ、まだこの状態が続くのかと歌ったのではないのでしょうか。

そうすると、この詩編の歌を歌うということは、イエスさまが、十字架の上においても、なお、神を重んじていたということ。神の前にひざまずいておられたということ。神が語られるのを待っておられたということ。神が働かれるのを受け入れる姿勢を取っておられたということです。わたしたちも今、ここで礼拝を守っています。礼拝をするということは、神の前においてひざまずくということです。神を重んじるということです。神が働かれ、神が語って下さることを信じて、それを大切にすることです。だとすれば、イエスさまは十字架上でさえも、父なる神のみ言葉を聞いておられた、神がなさるこ

とを、受け入れようとしておられたとしか捕えようがありません。

イエスさまは、なぜわたしをお見捨てになったか、と問うておられる。見捨てたのは神です。ここでは神が働いておられる。神がご自身の子イエスを突き放しておられる。その突き放しておられる神のみわざを、主イエスは全身をもって受け止めておられる。そしてなぜ、わたしを見捨てるのかと、問い直しておられます。なぜ、主イエスは見捨てられたのか。「まことの人」になられたからです。わたしたちと同じ人間になられたからです。そして、わたしたちが神から捨てられてしまっているということを、最も深いところで、受け止めておられるからです。では、神に見捨てられるということは、いったい何を意味するのでしょうか。

聖書は、肉体は滅びても、霊魂は不滅だから大丈夫、というようなことは語っていません。この福音書は、イエスさま

の魂だけが、父なる神のところに運ばれたとは書いていない。

あるいは、イエスさまの十字架の周りを、人びとは捨てたけれど、神はお見捨てにならなかったと言って、クリスマスの夜のような、天の軍勢が周りを取り囲んでほめたたえていたということもない。イエスさまは神に捨てられた。神に捨てられた者としての死を、味わっておられる。どうしてか。主イエスが、まことの人間になってくださったからです。そして、人間の方から神を捨てた時に、どのように厳しく神に捨てられるかということ、ここで味わっておられる。この時周りには、神を口にしている人々がたくさんいたはず。神の名をもって、イエスを遂に殺すことができたと喜んで、見守っている人もいれば、イエスに直接声をかけて、あなたが神の子だと言うのであれば、その神さまが必ず助けてくれるだろうから、その神の子であることを証明するために、ここで、十字架から降りてみたらどうかと罵る人たちもいた。これは確かにそうだと思います。イエスさまが、神の子であるならば、神さまがこんなところに放っておくはずがないではないかというのは、その通りで

す。ではなぜ、その通りのことが起こらなかったのか。繰り返しますが、神のみ子がわたしたちと同じ人となってくださったからです。わたしたちが捨てられるということを、いや捨てられるということがどういうことなのかを、ここで示されたのです。

わたしたちの心は罪のために鈍くなっていますから、神さまに捨てられるということの意味が分かっていません。けれど、まさにそこに立って、けれど、主イエスは、「わが神、わが神」と呼び続けられる。ここに神の子のなさり方の不思議があります。

昨年わたしたちは天に召された二人の姉妹と共に最後の礼拝を守る時が与えられ、この礼拝堂で一緒に礼拝を守ることが許されました。礼拝の時には、第二礼拝室に柩を縦に置きました。これも礼拝する者の姿勢を、亡くなってからも取るようにと考える教会の姿勢です。礼拝する者としての姿勢を柩にお

いても言い表すということなのですが、今日のこととつなげてみれば、主イエスの十字架上での祈りが、わたしたちをもっとも深い所から支えてくださるという信仰を、言い表すと言ってもいいと思います。とても幸いなことに、そして少しおかしな言い方かもしれませんが、わたしたちは、どんなに絶望しても主イエスのように絶望することはもうありません。なぜ、神さまお見捨てになったのですか、わたしは独りぼっちですと想った。イエスさまは、実際にそうお思いになったはずですが。けれど、わたしたちがそう想った時に、わたしたちは独りにはなりません。主イエスがおられます。どんなことがあっても変わらないことです。主イエスはわたしたちよりも、もっと深い所で、罪人として、神に捨てられた者の苦しみを味わってくださる。そして、あなたがたの誰ひとり例外なしに、わたしほど、もう苦しまなくてもいいのだとおっしゃってくださる。まことに、そのような意味において、心に深く刻み、繰り返し口にすべき、み言葉が与えられていることを、感謝いたします。祈ります。

主イエス・キリストの父なる神さま。主の叫びを、わたしたちは何度忘れることかと思えます。それを忘れてしまうからこそ、自分の苦しみ、自分の嘆きの方が、主イエスの嘆きよりも深いかのように思い込んでしまいます。どうか、死におびえるとき、人の愛が断ち切られて絶望するとき、あなたのみ顔が見えなくなったと思いついてしまっていて、深い嘆きに捕えられるとき、他のどんな言葉を忘れても、このみ言葉を思い出すことができますように。そしてどうか、あなたがわたしたちと共にいつも歩んで下さることを、いずれ遭遇するそれぞれの死の床においても確信することができるようにしてください。主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。 アーメン

讚美歌

讚美歌 21-296-1 (いのちのいのちよ)

献金

讚美歌 21-65-2

報告

週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>